

# ガリシア語における再帰代名詞 *se* を伴う人称不定詞<sup>1)</sup>

O Infinitivo Pessoal cun Pronome Reflexivo *se* en Galego

浅 香 武 和  
Takekazu ASAKA

## はじめに

ロマン諸語のなかで、ガリシア語とポルトガル語の特異な文法事実の一つに人称変化をもった不定詞がある。祖語のラテン語においても不定詞の人称変化はない。こうした特別な発達をとげた不定詞は、主語の人称および数に応じて変化するので、一般に「人称不定詞」と呼ばれている。<sup>2)</sup>

本稿では、ガリシア語において再帰代名詞 *se* を伴う人称不定詞が用いられるばあい、人称不定詞の用法から *se* の位置関係と役割について、現代ガリシア語の新しい資料をもとに考察してみたい。

まず、再帰代名詞 *se* の位置について、*enclítico* (後倚) と *proclítico* (前倚) の2つが考えられる。<sup>3)</sup>

1) 人称不定詞は状況補語(目的節)に用いられ、再帰代名詞 *se* が後倚のばあい。

Nos imos cuestionar a cualificación particular destes persoas; temos dúbidas, porén, da capacidade ou aptitude dalguns destes membros xulgadores *para pórense* a calificar e xulgar poesía galega, cando o seu campo de especialización é outro.

(A NOSA TERRA, n.º 246)

(我々はこれらの人物を評価しようと思うが、専門分野が異なる時、ガリシアの詩を評価および判定しようとする審査員のメンバーの何人かの資格または才能に疑いをもつ。)

2) 人称不定詞は状況補語(目的節)に用いられ、再帰代名詞 *se* が前倚のばあい。

Pero moitos outros só esperan -e xa esperan longamente- por unha cousa *para se poñeren* a traballar: unidade.

(A NOSA TERRA, n.º 246)

(しかし、他の多くの者は働きはじめようとするために、ただ団結を望んでいるし、また、すでに長い間望んでいる。)

## I 諸家の見解

1) García de Diego (1959: 102) によると、再帰代名詞 *se* が人称不定詞に伴うばあい、*se* は後倚し、その構成はつぎのようである。

前置詞 + 不定詞 + 人称語尾 + *se*

例) *Moita libertá pra falarense*, (話しあうための大いなる自由)

*Sen estreverense* a dar un paso mais, (あえて、もう一歩進むことなく)

2) Porto Dapena (1977: 178~9)

フェロラーナ地方の言語調査から、この地域のガリシア語は主動詞が前置詞に先行された不定詞を支配する時、代名詞の位置は後倚する。この現象は、おそらくカスティーリャ語の統辞法の影響であると述べている。

E hora de levantarse. (起きる時間です。)

しかし、ガリシアの他の地域および文章語では、se の位置は前倚する。

E hora de se levantar.

このことは人称不定詞についても同様であると述べ、次の例文をあげている。

Par vérmonos, temos que poñel-o día

(私たちは会うために、日を決めなければならない。)

3) Gondar (1978: 151)

ゴンドールの研究から再帰代名詞 (me, te, se; nos, vos, se) を伴う人称不定詞の頻度を、次のようにまとめることができる。

資料 \ 位置	後 倚	前 倚
中世ガリシア語	1	24
方言調査	9	6
現代ガリシア文学	121	65

4) Ogando (1980: 275)

中世ガリシア・ポルトガル語における人称不定詞に伴う弱形代名詞の位置に関する研究のなかで、代名詞は常に前に置くのが一般規則であると述べ、30例のうち規則に反する一例をあげている。

Et acolerōse entōçe a hūa uilla a que diz Tablada, (...) *para defenderense* y ... (La traducción gallega de la Crónica General: 7, 31-33)

(そして身を守るために、タブラダが言う村へ逃げこんだ。)

II 筆者の分析

筆者は従来の研究成果をふまえながら、再帰代名詞 se を伴う人称不定詞の用法を検討するために、現代ガリシア語の新しい資料を利用する。

- 1) ANT = A NOSA TERRA (Periódico Galego Semanal), Vigo. N. 8, 240-265 (17 de marzo de 1978, 22 de febreiro de 1984 - 14 de marzo de 1985)

ガリシアのビーゴで発行されている週刊ガリシア新聞「わが郷土」。

- 2) LÍNG = *Língua e Cultura de Galiza*. E.X.B. Ciclo Superior, María do Carmo Enríquez Salido et al., A Coruña, 1982, 477pp.

スペインでフランコ政権以後刊行され、中等教育で使用されている教科書『ガリシアの言語と文化』。

- 3) VG = La Voz de Galicia, Juan X. Moralejo Alvarez; *A língua galega e os seus problemas*,

Vigo, 1982, 247pp. *A língua galega hoxe*, Vigo, 1977, 145pp.

ラ・コルーニャで発行されている新聞「ガリシアの声」に連載された今日のガリシアの言語問題についての記事をまとめたもの。

1. これらの資料から、人称不定詞および再帰代名詞 *se* を伴う人称不定詞の用例を調べると、次の表のようになる。

資料		ANT	Líng	VG
人称不定詞の用例数		122	103	359
再帰代名詞 <i>se</i> を伴う人称不定詞		19 (15.57%)	5 (4.85%)	24 (6.68%)
位置	後倚 (enclítico)	11	2	7
	前倚 (Proclítico)	8	3	17

2. 人称不定詞の用法を統辞論の面から、次のように14種類に分けたい。<sup>4)</sup>

1) 状況補語(目的、時、原因、様態、譲歩、条件、他の前置詞句に支配) 2) 主語 3) 実詞補語 4) 形容詞補語 5) 直接補語 6) 叙述補語 7) 帰結補語 8) 前置詞付き補語 9) 同格補語 10) 名詞的補語 11) 現在分詞に等価 12) 比較級 13) 助動詞に依存 14) 他の用法(疑問文・感嘆文・関係詞節)

上に述べた分類から、再帰代名詞 *se* を伴う人称不定詞において、再帰代名詞 *se* の位置を細別すると、次のように表すことができる。

用法		資料	ANT	Líng	VG	
状況補語	目的	後倚	2		1	
		前倚	4	3	9	
	時	後倚	4			
		前倚	1			
	様態	後倚		2		
		原因	後倚	1		
	実詞補語		後倚			2
			前倚	3		7
現在分詞		後倚	2		1	
		前倚			1	
助動詞		後倚	2		2	
名詞的補語		後倚			1	

先にあげた資料から収集した再帰代名詞 *se* を伴う人称不定詞の用例を、上で分類した表にしたがって、例文をあげて考察してみたい。

1) 状況補語(目的): 再帰代名詞 *se* 後倚

(...), de que ises falantes cheguen a unha identificación tal coa súa lingua que lles dea pulos *pra afirmárense* nela e...

(VG, 1982 p. 82)

(話し手たちがアイデンティティを確めるために、彼らに唆すようなことばで、その話し手たちは一つのアイデンティティに達する。)

2) 状況補語(目的): 再帰代名詞 *se* 前倚

*Para se entenderen, axudaren e defenderen* van xuntos os do mesmo país. (Líng p. 50)

再帰代名詞 *se* は、相互的な表現を果している。

(お互いに納得し、助けあい、身を守るために同じ国の人々が力をあわせる。)

3) 状況補語(時): 再帰代名詞 *se* 後倚

*E logo de teren-se estricado* os pescozos, as cabezas ian-se recliando nos asentos bons, ...

(ANT 258)

完了のAspectoを表す人称不定詞 *teren estricado* (伸ばした)、再帰代名詞 *se* は助動詞 *teren* に後倚。

(首すじを伸ばしたのちに、頭はいすにもたれかかる。)

4) 状況補語(時): 再帰代名詞 *se* 前倚

*Depois de se teren producido* no mesmo día filtracións por parte dos membros do tribunal acerca do resultado final, ...

(ANT 247)

完了のAspectoを表す人称不定詞 *teren producido* (発生した)、再帰代名詞 *se* は前倚。

(最終決定について法廷のメンバーの側に、同じ日に、秘密がもれたあとで。)

5) 状況補語(様態): 再帰代名詞 *se* 後倚

Dan e reciben en armónica simbiose, sen perderen a súa personalidade mais *sen convertiren-se* en corpos estrañas e, ...

(Líng p. 293)

(それ自体の特異性を失わずに、変異体に変ることなく、調和のとれた共生に受与される。)

再帰代名詞 *se* は、前置詞 *sen* と同音重複をさけるために、後置したと思われる。

6) 実詞補語: 再帰代名詞 *se* 後倚

En cabeza dos cismas está *o de perguntárense se* a lingua galega terá ou non terá Gramática.

(VG, 1982. p.144)

(分裂派の考えには、ガリシア語が文法をもつだろうか、それとも、もたないだろうかについて自らに問いかける事がある。)

7) 実詞補語: 再帰代名詞 *se* 前倚

Tamén argumentaba Luís Moriño no tocante *ao feito de non se teren dado* a coñecer os nomes

dos seis finalistas, que estaban *a ponto de se publicarem* algunhas novelas das que se presentaron a este prémio. (ANT 258)

最初の再帰代名詞 *se* は否定辞 *non* により前倚、完了のAspectを表す人称不定詞 *teren dado* (与えた)。つぎの *se* は受身を表す。

(6人の最終候補者の名前を知らせなかった事に関して、ルイス・モリーニョもまた議論していた。そして、この文学賞に選ばれた小説の何冊かが発行されるばかりであった。)

8) 現在分詞に等価：再帰代名詞 *se* 後倚

(...), e a tendencia dos ions *a saírense* do confinamento naquelas partes máis estreitas, neutralízase por aneis de electróns que, ... (ANT 255)

(イオンの傾向は、緊密な隣接部から逸脱しながら、電子の輪に中和化する。)

9) 助動詞に依存：再帰代名詞 *se* 後倚

Os animadores *deben* preocuparse dos colectivos máis marxinaos e *situárense* a marxe das situacións. (ANT 257)

再帰代名詞 *se* を伴う人称不定詞 *situárense* は、助動詞 *deben* と隔るために用いられ、近接するばあいは非人称不定詞 *preocuparse* が用いられる。

(活動家たちは疎外されている集団に気をつかうべきであり、また自分たちもそういう状況に身を置かなければならない。)

10) 名詞的補語：再帰代名詞 *se* 後倚

(...); no teatro aristofánico *o megarenses* é prós atenienses-vilegos ou 'urobanos' por escelencia-o exemplo chocalleiro dun falar badoco; (VG 1977 p.71)

(アリストファネスの劇で、〔芝居〕を小間切れにする事は、粗野なことばで道化者の例をアテネの人々、つまり、町民もしくは、特に「市民」に向ってすることである。)

## ま と め

1. 中世ガリシア語では、再帰代名詞 *se* は前に置く (proclítico) 一般法則が、現代ガリシア語では *se* の位置はゆれている。
2. 再帰代名詞 *se* の使用頻度は、中世期に比べ現代において増加している。
3. 前置詞 *para*, *de* に先行された人称不定詞が状況補語(目的)、実詞補語の機能を果たす時、再帰代名詞 *se* は人称不定詞の主語を明瞭にするため前倚 (proclítico) の傾向がある。すなわち、再帰代名詞 *se* は人称不定詞をひき立てるはたらきがある。
4. 助動詞に依存、および現在分詞に等価の機能を果たす人称不定詞において、再帰代名詞 *se* は後倚 (enclítico) の傾向がある。

## 註

1) 本稿は、日本ロマンス語学会第22回大会の統一テーマ「再帰代名詞 *se*」(昭和60年5月25日、於早稲田大学)において矢島猷三先生の司会で口頭発表した草稿をもとに加筆、補正したものである。発表の際、池上岑夫先生(ポルトガル語)直野敦先生(ルーマニア語)、また関西スペイン語学研究会の諸先生から有益なコメントをいただいた。ここに、感謝の意を表したい。

2) 「屈折不定詞」 *Infinitivo Conxugado* ともよばれている。拙稿 “En torno a la denominación del Infinitivo Personal”, *Lingüística Hispánica*, vol.6 (1983), pp.43-54.

3) ガリシア語には、間接再帰文は存在しない。例) スペイン語 *Me comí las pescadillas.* ガリシア語 *Comin as pescadiñas.* (私は小鱈を食べてしまった。)

ガリシア語の再帰代名詞(弱形代名詞)の位置はつぎようになる。

1. 再帰代名詞 *se*; 肯定→後倚、否定→前倚。例) *Quixa-se.* (彼はなげく)、*Non se quixa.* (彼はなげかない。)

2. 従属節→前倚。例) *Dixo que se foran a feira.* (彼らは、お祭りに行ってしまったと言った。)

3. 副詞が動詞に先行するばあい。

3-1 *xa* (すでに)、*tamén* (～もまた)、*sempre* (常に)、*solamente* (単に)などの副詞が先行する時→前倚。例) *Xa se foron.* (もう彼らは行っちゃった。)

3-2 *aquí* (ここ); *alí, aló, alá* (あそこ)など場所を示す副詞が先行する時→前倚、後倚の両方。ただし中世ガリシア語では前倚が多い。例) *Aquí se conoceron.* = *Aquí conocéronse.* (ここで彼らは知りあった。)

3-3 *mañá* (明日)、*onte* (昨日)、*logo* (後で)、*daquela* (その時)など時を示す副詞が先行する時→後倚。ただし、*logo*、*daquela* は中世ガリシア語では前倚が多い。

例) *Mañá iraste.* (明日君は行っちゃう。)  
*Daquela foise.* (その時、彼は行っちゃった。)

3-4 複合時制の時→助動詞に後倚。

例) *Téño visto moitas veces.* (私は彼にししば会った。)

4) 拙稿「ガリシア語の人称不定詞の用法」日本言語学会『言語研究』87号(1985)、P. 173.

## 参 考 文 献

Asaka, T. (1984) “Empleos del Infinitivo Personal en Gallego Moderno”, *Lingüística Hispánica*, vol. 7, pp. 1-22.

(1985) “No Xapón estudase o galego”, *A NOSA TERRA*, N. 268.

García de Diego, V. (1959) *Manual de Dialectología Española*, Madrid.

(1984) *Elementos de Gramática Histórica Gallega*, Santiago de Compostela.

Gondar, F. G. (1978) *O Infinitivo Conxugado en Galego*, Santiago de Compostela.

Ogando, Victoria (1980) “A colocación do pronome átono en relación co verbo no galego-portugués medieval”, *Verba*, 7, pp.251-282.

Porto Dapena, X. A. (1977) *El gallego Hablado en la comarca Ferrolana*, Santiago de Compostela.

Rojo, Guillermo (1973) *Perífrasis Verbales en el gallego actual*, Santiago de Compostela.

Santamaria, A. (1974) *El verbo gallego*, Santiago de Compostela.

(1985.9)